

文 献 紹 介

グザヴィエ・ド・ブラノール著・手塚 章/三木一彦訳：『フランス文化の歴史地理学』

二宮書店，2005年12月刊，A5版

534+92頁，8600円（本体）

本書はグザヴィエ・ド・ブラノール著『Géographie historique de la France（フランスの歴史地理学）』1988年の日本語訳である。ポール・クラヴァルの執筆になる第11章「広域組織のフランス」（原文で60頁）を加えると，大部になりすぎるので本書では訳出されていないという。ブラノールの書いた部分だけでも相当の分量がある。

伝統的にフランスの人文地理学は歴史的方法の記述を進めながらも，歴史地理学の体系をはかった地理学書は書かれてこなかった。その意味で，本書はフランス人による初の歴史地理学体系書といってよい。扱う研究対象は，ケルト・ローマ・ガリアの時代から現代のフランスへと広範な時代を取り上げた歴史地理学の概説書である。本書は3部から成り，第1部はフランスの形成，第2部はフランス国土の伝統的空間組織，第3部は近代のフランス空間構造の求心化と多様化へ，結びへと続いている。

さらなる章立ては次の通りである。

第1章 ガリアの地塊

第2章 ローマの影響

第3章 ガリアからフランスへ

第4章 フランスの誕生

第5章 主要な地域的コントラスト

第6章 二次的な区分

第7章 パリへの集中

第8章 文化の統合と多様性—作用と反作用—

第9章 経済空間の分化

第10章 農村からの人口流出と都市化

本書をつらぬく大きなテーマは，フランスの空間組織を歴史のなかで考察することである。縦書きの日本語訳も読み易く，短文で流麗な文章が続き，読んでいてあきさせない。地理学書のみならず，歴史書・文学書，さらに詩集などからも多数引用し，文学性の高い記述が続いている。例えば，次のようなまとめがある。

以上で述べたことを要約するならば，領域の空間は，何よりもまず政治の空間であり，権力行使の空間であった。経済活動（とりわけ，日常的な交流）は，それよりも狭い範囲を空間単元にしていた。また，思想や芸術など，上層文化にかかわる現象では，普及や拡散の範囲がはるかに広大であった。ペイや州などの領域空間は，いずれの現象についても，人々の交流を規定する主要な空間的枠組みではなかった（p.247）。

本書を紹介するにあたり，各章の内容を要約するにはあまりにもテーマが多く，全体の傾向を把握するのと，筆者の興味を引いた箇所の一部を取り上げるにとどめたい。本書は系統的立場からの全国的規模の分析があるかと思えば，地方・ペイ毎の詳細な分析もあり，メリハリに富んでいる。読んでいて驚くべきは，フランス文化に関する著者の知見を惜しげもなく披瀝している点にある。この点に関しては，本書の至るところに読み取れるが，ガリアにおけるギリシャ文化の影響（pp. 40-42），ローマ期ガリアの地域景観（pp. 59-72）をはじめ，多数の図を挿入しながら詳細に説明している。特に，パリへの集中を論じた第7章は，図を参照しながら本文を読み進めると，作業しながら理解を深める講義にも使える部分である。フランス巡回（ツール・ド・フランス）は自転車競技のみ有名になったが，職人たちの巡歴や子供向けの教育書にも導入されている。なかでも，ブルーノ著『二少年によるフランス巡回』は1877年から1901年までに600万部が販売されたという（p. 369）。本書は複数の図から成る82頁の図版を中心に，様々なテーマについて詳しい説明がなされている。ともすれば単調になりがちな地理書のスタイルを超えているのは，著者のフランス文化に対する高い識見に基づいた叙述である。あるテーマについての通説を文献を参照しながら小研究史として提示し，そのあと反論を加えながら弁証法的に論理を展開し，著者みずからの見解も加えている点は見事である。

本書は歴史地理学のみならず，フランスの文学・歴史・言語・文化などに興味を抱く読者には

非読んでいただきたい本の一冊である。事項索引 7 頁，人名索引 4 頁，地名索引 13 頁，参考文献 30 頁，原注 38 頁と学術書としても充実した内容である。

本書の訳出には，1997 年から 2001 年まで 4 年をかけて訳出し，最終原稿が完成したのが 2004 年という。8 年という長い年月をかけたご労作にまず

敬意を表したい。難点をいえば，本書の全体を図版を参照しながら読み通すのに長い日時を要する点である。しかし，実に読み応えのある本であり，個人的蔵書のみならず公費でのご購入をお薦めしたい。

(大嶽幸彦)